

腰をかけた人

甲「先生、私はいつたいたどうしたのでしょうか。近ごろはさっぱりだめになりました。」
乙「何がそんなにだめになりましたか。なんだか暗い顔していますね。」

甲「いったい私は昨年春四月、はじめて如来の本願に気づかせられて、びっくりしてあれほど天地も動いたほどおどりあかつて喜びましたのに、近ごろは何もなくなつた気がするのです。どうにかしていただけないでしょうか。」

乙「なるほど、そんなことではどうにもなりませんね。」

甲「どうにもならんでは困ります。なんとかしてください。」

乙「どうにもならないものはどうにもなりません。」

甲「そうおっしゃらないで、どうにかしてください。どうしてあの時のような喜びが続かないのでしょうか。」

乙「そんな喜びをつづけて何にします。それを続けようとするのが無理なのです。」

甲「なぜでしょうか。パタッと火が消えたような寂しさです。」

乙「あなたは何をそんなに喜んでいたのですか。」

甲「それは如来のお慈悲のありがたさです。」

乙「そうじゃないのでしょうか。話を聞いて話に酔うか、むせるかしたのでしょうか。それは夕飯酒と同じだったのではないのですか。そんな喜びは、それをさます苦しみの一つも出てくれば消えてなくなります。」

甲「では先生は何を喜んでいなさるのですか。」

乙「きつぱりと申します。今日生きていることです。今日生きていること自体がうれしくありがたいのです。」

甲「如来のお慈悲ではないのですか。」

乙「私が生きていることを喜ぶことこそ如来のお慈悲を喜んでいるのです。私が今ここに、喜びや苦しみや、山越え野越え、いろいろなことを味わって生きていることを喜ぶようになったのは、南無阿弥陀仏を聞き開かせてもらったからです。」

甲「そこをもつと言ってください。如来のお慈悲を喜んでいなさるのですか。生きていることなのですか。」

乙「わからぬ人ですね。寺にまいった時はありがたいありがたいと涙を流しているが、日常の生活になると、太い足に小さい靴をはいたような、無理な不自然があつて、苦しみと愚痴だらけ、それですから、ありがたいのも説教のある時だけでしよう。そんなありがたさが何になります。それは浪花節で感激した程度のものなのです。」

世の中には、五年も八年も前のびっくりした思い出を、毎日とり出して喜んでいる人がありますね。しかし今日食べたものは今日の養い、昨年食べたものは昨年の養いです。嘔吐したものをまた食べるのは汚いですね。」

甲「では帰命の一念はないのですか。」

乙「そんなこと言いました。帰命の一念とは、今まで自力ではからつていた、疑いがかためていた機がこわれて、ほんとうに、自然法爾の生活が恵まれるその出發

のことです。あなたのように感激などをあてにしていたり、よろこびを問題にしているのこそ、自力がのかない証拠であり、帰命の一念がほんとでない相です。『廻心ということただ一度あるべし。』一切の自力のはからいを廻向して、願力に乗托すると、生きていくことがうれしくなります。」

甲「私はなぜそんなになれないのでしょうか。」

乙「それは生き方が腰掛けだからです。」

甲「なぜ生き方が腰掛けなのでしょう。」

乙「南無阿弥陀仏をほんとに聞かないからです。あなたのようにほんとに聞きぬかないで、あなた自体を改造しようとしている傲慢な人には、そうなるのがあたりまえです。当然の罰当たりですね。」

甲「わかりません。私は聞いたと思いますけどね。」

乙「腰掛けということがわからないのですね。ここに一つの店があります。この店は世界一等の商法を知った店で、必ずもうかるし、人にも信用されるし、まがつたこともしないのだとします。ところが、この店に一人の青年が入店を申し込みました。この青年は、商法をならいに来たのです。ですから商法を習ったら出て行くかと考えているのですから腰掛けです。それをこの場合悪いというわけではありませんが、ここに二つの世界があるというのです。この男は根は正直ではないのです。ただ商法、といつても金もうけを習うために来ているのです。ところが、この店の主人、そして妻君、そしてその長男、そして番頭たちは、この店より出て行くとは思わないのです。したがって主人は店であり、店は主人です。妻君にしても、自分が店であり、店が自分であります。つまり店と自分か一つになります。その後からの青年は、店が自分ではないのです。店によって商売を習ってやろう、もうけてやろうと、店と自分とは二つです。したがってこの店では腰掛けです。」

甲「なるほど私が今の青年ですね。」

乙「この青年はそのうちになまけはじめました。そうしてこの店だつてちつともちがつたところはないではないか。人をひどくこぎ使うの、遊ばせないの、お金をくれないのと、そろそろ横にむきはじめました。腰掛けのものが功利的なのはつきものです。店の他の人たちは、店が不況になろうと、損になろうと、言うて行く所はないのです。自分が店ですから。青年は功利主義なのですから、たびたび活動に行かしてくれた時や、ご馳走を食わしてくれた時や、遊ばれた時や、お金をくれた時ほど喜ぶようになりました。店の人は商売それ自体を喜んでいるのとは反対に。あなたがそれなのです。去年四月とかの喜びもそれだったのです。店と自分とが二つになっているように、如来とあなたが二つになった喜びで、とんだものを喜んでいたので。」

甲「急所をつかれた気がします。まったく腰かけで、大もうけにかかっていたのです。店と一つになりきらないで。」

乙「一つになろうとすることも、すでに自力です。はからいです。宇宙とあなたは二つではない。自然とあなたは二つではない。社会とあなたは二つではない。それなのに宇宙で腰かけ、大自然の中で腰かけ、仏心の中で腰かけ、その腰かけの相こ

そ、あなたの生き方を抽象的にし、死んだ生き方にし、自力のはからいをさせ、功利的な考えから一步もぬけきらせないのです。」

甲「わかりました、わかりました。私がそのとおりだったのです。もつと聞かなければだめです。店と自分と一つになることこそ、商法の極意だったのです。そして商売そのものがおもしろくなつた時、生きることがおもしろくなる。」

乙「そうです。仏の本願力と私と二つで一つ。法界と私と二つで一つ。浄土と私と二つで一つ。」

甲「それが仏凡一体の味ですね。そこには、もう対立的なはからいはいらぬ。」

乙「と言つて、あなたは、その話に感心して、聞いて徹底してあなたがそれになることを忘れてはだめですよ。」

甲「そうでございます。これから本気で聞き開きます。」

乙「本気で聞いてそうならうとするのが最後のはからいですから、そうならなくてもいいところまで聞きなさい。そこになるともう口では言えません。うんと如来をお聞きなさい。」